ラフから得られるものは多い。第一に戦後、地域社会と学校と家庭の三者の関係性の変容に注目しながら、教師たちが地域の人間形成力を活かそうとした実態を明らかにしたことである。1960年代から1980年代までを射程に入れた長期の定点観測の結果、地域の変容、家族の変容、子どもの変容など、学校を取り巻く大きな変化にもかかわらず、教師が自己変革を試みながら、眼前の子どもに誠実に向き合い、保護者や地域から信頼を得ていく過程を辿ることができる。市場化する教育状況の中で、教師のあり方を考える素材となり得る。

第二に、本書の特徴である「現場主義」、特に人物の生活史を重視した点である。教師としての教育活動の側面のみを切り取るのではなく、一人の人間としての生活の営み、人生の歩みの中で、教育という職務や地域での教育活動がどう位置付くのかという視点からの叙述が刺激的である。とりわけ教師の妻も地域に生きた一人の人間として描いており、家庭生活が職務に与える影響力の指摘には説得力があった。地域の教育といっても、そこに生きるひとり一人の人間の生き方に大きく規定されることにあらためて気付かされた。

最後に本書から刺激を受けた点について。到達度評価を地域と学校の関係性を見る物指しとして着目したのは卓見である。その上で、到達度評価実践そのものの評価をどう捉えたらよいのか。奥丹後に育ち、「地域に根ざした教育」を享受し得た子どもたちがその後どのような人生を歩んでいったのか。子どもの生活史はどう描けるか。この点が本書を読んで最も関心をかき立てられたことである。「地域を解放する学力」「教育の住民自治」の成果は、すぐに目に見える形で現れるものばかりではない。長期波動として子どものその後の経験の中で活かされ、また再構成され、熟成されてその人の生き方、家庭生活、地域や職場の中で現れるものも多いはずである。無い物ねだりかもしれないが、子どもの生活史を通じて地域に生きた教師の実践が持ちえた意味や課題に迫ることができるし、それはまた「現場主義」を中心とする著者独自の手法でこそ検証可能である。続編の発表が楽しみである。

（学術出版会、2014年９月、428頁、5,600円）

高橋裕子 著

『明治期地域学校衛生史研究
―中津川興風学校の学校衛生活動』

梶山　雅史（岐阜女子大学）

本書は平成24年度に著者が兵庫県立大学大学院に提出した博士学位論文を、加筆修正したものである。最初に本書の構成を示しておこう。

序　章　課題と方法
第一部　学校構想と初期の学校衛生活動―学校創設（明治六年）から明治一二年―
　第一章　中津川興風学校の学校構想
　第二章　明治初期における小学校の病気欠席の問題
第二部　地域と教師たちの学校衛生活動―明治一二年から明治二四年―
　第一章　明治一二年のコレラ流行に対する中津川興風学校の「閉校」措置
　第二章　中津川興風学校と岐阜県私立衛生会の接点―地方私立衛生会の活動と学校衛生―
第三部　明治政府の学校衛生政策と学校現場―明治二四年以降―
　第一章　明治政府の学校医制度―三宅秀と三島通良の学校医論の比較―
　第二章　中津川興風学校の学校医の活動とその意義
終　章
付　録　中津川興風学校の学校衛生活動年表―『中津川興風学校日誌』（明治七～三七年度）を資料として―

序章で本書の目的が大略次のように語られている。従来の学校衛生史研究・学校保健史研究の多くは、国家制度変遷の研究であった。学校現場での保健・衛生活動の実態や考えがいかなるものであったかを取り上げ、資料に基づいて実証的に検討されることはほとんどなかった。本書では視点を転換し、岐阜県の中津川興風学校にスポットをあて、「興風学校日誌」を中心に明治期の学校衛生の活動実態を探る。と端的に宣言されている。

中津川市立南小学校には、明治７年からの学校日誌・公文書綴はじめ膨大な学校文書が保存されている。浅野信一先生（92歳）を中心に中津川市教育文化資料委員会と市教育委員会によって営々と築かれてきた史料保全・整理研究・復刻事業。これはまことに希有の偉業といえる。著者はこの小学校に出会い、ただならぬ学校文化、地域風土に強烈な衝撃を受けたに違いない。創設期の経緯からたどる本格的な調査研究へと探求心をかきたてられた様相が、42頁分に及ぶ注記の克明さによく窺われる。

第一部では、教育史研究者の先行研究、仲新、梅村佳代、倉沢剛等諸大家の関連文献を逐一読み込み、また宮地正人『幕末維新期の社会的政治史研究』や「明治維新と中津川」等の射程の深い連作をも踏まえ、明治６年の五通の小学義校開業願書について緻密な比較検討を進めている。新たに市岡家文書の「小学義校設立調書」を取り上げ、南小学校所蔵の複数「小学義校開業願書」との作成順序を同定し、当初の義校時習館の学校構想から「学制」に基づく学校構想への「開業願書」修正過程が明らかにされた。さらに木曽福島郷土館の山村家「家中系譜」史料を用いた一連の考察は、新たな研究成果として高く評価できる。中津川村の義校設立を担った地域の有志・有力者達の主動性、自治志向の解明には、指導的人物の系譜と役割について地道な研究の必要性をあらためて痛感させられる。宮地正人著『歴史のなかの『夜明け前』』が2015年３月に刊行された。格好の追い風を受け止め、平田国学門人達が中心となって設立した時習館の創立事情と学校構想、その後の「素地」の発源・展開について、本書の検討課題を今後実証的に深めていただきたい。

学制期の分析では、明治９～10年段階、学校衛生制度が整備される以前、興風学校では病気欠席・「退校」の場合、「雛形」による願書に加えて、「医案書」を添付し、そのことを確認した上で戸長が奥印し届け出ていたことが明らかとなった。その意図について、欠席理由の偽装防止や、安易な欠席を取り締まる管理目的であったと解釈される可能性があるが、著者は、むしろ、病気という欠席理由を医師に関わらせて特定することで、欠席中の学習や学校生活の今後に注意を払う目的で行われた手続きではなかったかと見る。「医案書」添付は、学校における保健管理の方法・技術という点で、注目すべき最初の事例と捉え、この興風学校管理者の学校保健観の成立は特筆すべきものと位置づける。学制期における学校保健観の実相をあらためて問い直してみる興味深い問題提起と受けとめたい。

第二部では、明治12年９月コレラ流行に際して、興風学校管理者が招集した教員会議に注目し、閉校論（衛生優先派）と反閉校論（教育優先派）の論議が交わされ、「衛生と教育を両立させる」ものとして閉校措置に至った具体的経緯に分析を試みている。著者はこの論議に現代の「学校教育に資する保健管理」に通じる論法が見られると評価している。明治16年段階、県衛生諮問会が開催され、濃飛私立衛生会設立、さらに郡単位で恵那私立衛生会が設立される。地域衛生会の「幹事」に興風学校首座教員小林廉作が入り、また興風学校の関係者も衛生会に参画し学校衛生を協議し、共同して学校現場の課題が担われていた様相が明らかにされている。

執筆者からコメントを加えれば、明治12年に内務省に中央衛生会、各府県に地方衛生会が設けられていく動きのなかで、岐阜県では翌年８月に岐阜県衛生会が設置されていた。この地方衛生会の組織・機能の現実的展開に類比して、岐阜県は地方教育会の設置を提起していた前史がある。その背景を踏まえれば、さらに興味深い歴史像があらわれてくるであろう。

第三部では、明治24年（1891）明治政府が学校衛生の制度化に着手し、明治29年（1896）に文部大臣の諮問機関として学校衛生顧問会議が設置され、明治31年に学校医制度が設立された時期を対象とし、政府の学校衛生政策と学校現場の事例にスポットを当てている。これまで研究が深められていない三宅秀（学校衛生顧問会議初代議長）の学校医・学校衛生観を検討した上で、学校衛生制度づくりを主導した三島通良（文部省学校衛生主事）を対比させ、新たな視点を加えることによって、明治政府の学校衛生制度・政策の時代的特性をより鮮明に描き出している。

ついで学校現場における学校医の活動実態について、明治16年３月に東京大学医学部「別課医学」を卒業していた林淳一（恵那郡坂下村出身）が、明治31年から中津川尋常高等小学校の学校医となって展開した学校衛生活動が、『興風学校日誌』から掘り起こされている。明治36年から38年にかけてトラホームが流行、当時、三島通良や文部省はトラホームの治療は学校医の職務ではないと考えていたが、中津川では注目すべきことに学校医が治療活動を実践していた。伝染病流行の現実の前では、学校現場が先行し、国家制度を越える活動が実際に行われていた。興風学校の先駆性並びに他県の類例に言及し興味深い考察を提起している。恵那郡医、興風学校学務委員・学校医となった林淳一という存在について、かつて中津川自由党の活動家であったことを含めて、キイ・パーソンの一人として、今後本格的な研究を望みたい。

地域の教育実態の解明を目指し、中央・地方教育会の活動実態の研究に取り組んでいる執筆者には、本書は身近に感じられ実に強い刺激をうけた。学校教育の基礎をなす衛生領域の研究の重要さ、学校衛生・保健史の興味深い研究課題から多くを学ばせて頂いた。今後、地方衛生会の詳細な分析にも踏み込み、重層的な視点の拡大と、仮説部分の実証的研究の進展を大いに期待したい。

（学術出版会、2014年11月、322頁、4,800円）

斉藤利彦 編

『学校文化の史的探究

―中等諸学校の『校友会雑誌』を手がかりとして』

和崎光太郎（京都市学校歴史博物館）

旧制中等諸学校の『校友会雑誌』（以下、『雑誌』）に掲載されている生徒の声を、生徒の本心として読むか、それとも教員の代弁と捉えるか。このような単純な二項対立はナンセンスだと自覚しつつも、史料として『雑誌』を扱おうとした者は、一度は頭を悩ませたことがあるだろう。本書は、このような悩みをひとまず脇へ置き、脇に注意を払いつつも、臆することなく『雑誌』を手段かつ目的として扱い学校文化の探究を試みた、共同研究の成果である。

そもそも学校文化とは、1970年代から用いられ始めた分析手段としての概念であり、戦前から「学校に文化がある」という思考の枠組みが存在したわけではない。ゆえに序章では、本書における学校文化が何を指すのか、J・エラーと久冨善之に依拠しつつ説明されている。つまるところ学校文化とは、教員による指導や制度の影響を受けつつも、生徒の主体性に基づき共有・継承されていく多様性を帯びた何か、とされる。その上で、分析視角を４つ提案しており、それらがそれぞれⅠ部、Ⅱ部、Ⅲ・Ⅳ部、Ⅴ部に該当している。目次を見ると、実に多くの、かつ多彩な専攻の著者が名を連ねている。ゆえに本書を紹介するにあたっては、与えられた文字数を大幅に費やす覚悟で、その構成を示さねばならない。

序　章　学校文化の探究へ　斉藤利彦
第Ⅰ部　学校文化とその表象
第１章　『校友会雑誌』にみる学校文化―表紙の変遷をとおして　斉藤利彦
第２章　生徒の表現の場としての『校友会雑誌』―制約と可能性　市山雅美
第３章　学校文化に現れた天皇（制）イメージ―『校友会雑誌』における「御大典」・行幸啓の表現から　茂木謙之介
第Ⅱ部　学校文化における相克の諸相
第４章　学校紛擾における要求実現のための生徒の行動様式―同盟休校と決議文を中心に　市山雅美
第５章　拮抗する青年論―明治後期中学生による応答の諸相　森田智幸
第Ⅲ部　校風と学校文化
第６章　実業学校『校友会雑誌』にみる青年の社会観・実業観　井澤直也
第７章　高等女学校の校風文化と卒業生―大正から昭和期の跡見女学校　歌川光一
第Ⅳ部　生徒文化の多様な展開
第８章　自伝にみる師弟関係―『私の履歴書』の分析から　稲垣恭子
第９章　近代日本の学校文化と文芸活動―『校友会雑誌』という磁場　斉藤利彦
第10章　創作活動のアジール―昭和戦前戦中期盛岡中学校『校友会雑誌』短歌欄・短歌作品の分析から　茂木謙之介
第11章　高等女学校における教師と生徒による音楽活動―『校友会雑誌』上における表現を手がかりに　古仲素子
第Ⅴ部　帝国日本と学校文化
第12章　大陸への修学旅行と帝国日本